

JR西日本財団 NEWS

公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団

〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号 TEL: 06-6375-3202 FAX: 06-6375-3229

E-mail: jrwezaidan@westjr-anshin-f.jp http://www.westjr-anshin-f.jp/

2011.9 発行 Vol.5

CONTENTS

- ▶ 「こころのセミナー」の開催
- ▶ 上智大学グリーンケア研究所、あしなが育英会
- ▶ 「救急フェア」の開催
- ▶ 助成事業紹介
 - 各公募助成先 (5 団体)
 - 東日本大震災訪問録
- ▶ TOPICS
 - 今後の予定

「こころのセミナー」～『いのち』を考える 支え助け合う社会をつくる～ の開催



苦悩や不安、悲しみを抱える方々に心の癒しを提供するとともに、支え助け合うことのすばらしさを感じていただくために、昨年度に引続き「こころのセミナー」を7月24日(日)に開催しました。

今回のセミナーでは、約3,000名という定員500名を大幅に超えるご応募をいただき、当日も開場1時間前から行列が出来るほどでした。「身近に心が病んでいる方がいるため、こういうセミナーに参加でき、本当に良かった」「大切な人に少しでも寄り添い、生きていきたい」と、身近な方を支えたいという思いから参加された方もいらっしゃいました。

冒頭、佐々木理事長からご挨拶した後、当財団から助成を行っている社会福祉法人関西いのちの電話の八尾事務局長より、いのちの電話の活動状況をお話いただきました。いのちの電話の設立経緯をはじめ、過去10年間での相談内容の変化から伺える社会情勢や実際の相談ケースを参考にした取り組み内容を紹介し、「いのちの電話では、かけがえのない大切ないのちを守り支えていく活動を通じて、いのちを大切にできる社会を目指している。是非一人でも多くの方にご協力をお願いしたい」と呼びかけられました。参加者からは、「初めてのいのちの電話の活動を知った。活動内容を知ることができて本当によかった」とのお声をいただきました。



五木寛之さん

※関西いのちの電話の詳細な活動内容は、関西いのちの電話ホームページ《<http://www.kaind.net/>》をご覧ください。



関西いのちの電話 八尾事務局長

続いて、作家の五木寛之さんより「いまを生きる力」とのテーマで講演をいただきました。「東日本大震災以降、悲しみが人々のこころに蓄積している。人は生きている限り必ず悲しみに出会うものであるが、本人が悲しみを直視することで乗り越えることができる。かつての日本人は悲しみを大切に、その中から生きる意味を見出してきた。悲しむべき時にはきちんと悲しむことを大切にしてほしい」等の心に響くメッセージをいただきました。参加者からは、「悲しみを抱えて過ごしてもいいんだと思えた」「悲嘆の中にあって苦しかった気持ちが少し楽になった」というお声もあり、新たな気づきが得られる貴重な機会となりました。

以下のようなコメントを、参加された皆様からたくさんいただきました。本当にありがとうございました。

- 殺伐とした時代だからこそ、心が穏やかになれる本日のようなセミナーを継続して開催してほしい。
- 「悲しみを大切に」 というフレーズが新鮮な響きだった。
- 時代の流れとして、陽の面ばかりに気持ちが向く中で、陰の大切さを教えていただいた。
- まるで人生の哲学書を1冊読んだような気がするセミナーだった。
- 元気が出て、生きる勇気が湧いてくるお話だった。今の幸せをもう一度見つめ直したいと思った。
- 今の世相がよく分かり、自分に出来る事を考えるきっかけとなった。周りにもっと目を向けようと思った。
- いのちの電話の取り組み内容の重要性を知る事が出来て良かった。
- いのちの電話への相談内容等を知り、これまで自分がいかに恵まれていたかを実感した。

愛する家族や親しい人を失った後や死期を知ったことで体験する複雑な情緒的状态を「グリーフ（悲嘆）」と言います。上智大学グリーフケア研究所では、事故や事件、災害、病気等により愛する人をなくした方の悲しみ、苦しみに共感し、ともに歩むことを目的に、平成19年10月から「『悲嘆』について学ぶ」を開講しています。平成23年10月より第9期の講座がスタートします。



第8期公開講座（6月3日）で「悲しみを通してみえること—遺族会、24年の実践活動を中心に」をテーマに講演いただいた若林一美先生にお話を伺いました。

若林 一美（わかばやし かずみ）さん

子どもを亡くした親の会「ちいさな風の会」世話人。立教女学院短期大学学長。デス・スタディ、ホスピスの研究に早くから取り組み、米国ミネソタ大学社会学部「死の教育と研究」センターに研究員として留学。IWG（死と遺族に関する国際会議）会員。

—「ちいさな風の会」の発足の経緯やその当時の思いは。

1988年発足当時は、まだ遺族会なども、ほとんど存在しないような時代でした。死の周辺の様々な出来事を、その年の新聞に半年間連載していたのですが、その記事の読者の方たちからお手紙をいただいたことが会の発足のきっかけになっています。私自身は、アメリカ、ミネソタ大学にある「死の教育と研究センター」に勉強に行っており、遺族会の存在などを見聞し、日本でもこのような活動が出来れば良い、と漠然とは考えていました。

—会の発足当初に比べ①男性の参加者、②専門家の紹介を受けて入会される方、③自死が原因で亡くなられた方が増加しているとのことでしたが、その点についてどのように感じられていますか。

「悲しみを抱えること」自体や「悲しむこと」が、少しずつ社会の中で容認されるようになったこと、自分の感情を悲しみを含めて表現する方が増えてきたことも一因かと思います。そして何よりも、日本社会のなかで、自死によってのちを閉じる方が多い状況そのものが抱える問題があると思いますが、ひとりで胸のなかに秘めて生きるには、あまりにも重すぎる現状があることも大きいと思います。

—会の世話人を24年間続けている中で、実際に悲嘆で苦しめられている方と接し、「悲嘆」というものをどのように捉えられていますか。

大切な愛する人が、傍らからなくなることは、遺された人から生きる力を

奪うだけでなく、その人がそれまで生きてきた道のりそのものを全否定されたかのような体験です。自分の存在が曖昧な中、それでもなお、集会の折など、お互い同士がいたわり合い、何とか支え合おうとするようなお姿にふれると、「悲しみとはやさしさ」という思いを抱きます。

—実際に身近で悲嘆に苦しんでいらっしゃる方とかかわる場合はどのようなことが大切だと思われますか。

悲しみばかりではありませんが、自分以外の他者に対して、私たちはつい「相手のことを思って」という発想で傷つけてしまったり、悲しみの傷口を深めてしまうことがあります。“相手の全ては分からない”ということを中心に留めながら、その方に備わった時間を、傍らで、そっと見守ることくらいしか出来ないのではないかと考えています。

—最後に悲嘆をテーマとしたこのような公開講座についてどのように感じておられますか。

遺族会が発足した25年ほど前には、悲しんでいる人は「弱い人」であり、「悲しみとは立ち直るもの」「早く忘れるもの」というようにしか捉えられていませんでした。しかし、遺族会なども生まれ、このような公開講座も行われることで、悲しみについて社会の中で共有する機会が増え、「悲嘆」についての理解が深まり、それは悲しみを背負った当事者ばかりでなく、私たちが暮らしやすい社会を考えることにも繋がっていくと思っています。

訪問レポート

「目の前で家族や家が津波で流されていく光景を思い浮かべてほしい…。土台だけとなった住みなれた家…。今、起きていることを伝えていかなければならないと思った」

「出来れば東北で被災した方々を励まし、更には話を聞いて欲しい。それが被災した方々の心の慰めになると思う」

8月11日に訪問した淡路青少年交流の家で開催された「高校奨学生のつどい」の一幕である。今回の未曾有の大震災で遺児となった学生達に向けて、同じように親をなくした経験を持つ奨学生たちから励ましのメッセージを送るというプログラムの中で、実際に被災地を訪問した大学奨学生から現状や思いが語られた。高校奨学生とリーダーを務める大学・専門学校の奨学生たちは静かに聞き入っていた。

これまで何の関わりもなく顔も名前も知らない遺児たちに向けて、「一人じゃない」「一緒ががんばろう」といった励ましの言葉を熱心に書き記す奨学生たちの姿を見ていると、実際に被災地を訪れていなくても同じような境遇を持つ奨学生だからこそ共感できる思いがあると感じました。遠く離れた

場所から被災地の遺児たちを想いながら“共に前向きに生きていこう”と寄り添う気持ちがひしひしと感じられる時間でした。

あしなが育英会では、遺児の方々を対象に『自助』『連帯』『共生』をテーマとして年代別に“つどい”が開催されています。“つどい”は、遺児たちの精神的支援における中核をなす事業として、同年代の奨学生同士が語り合い、仲間をつくることで、自分が一人ではないことに気づき、希望をもって前向きに生きる力をもたらす場となっています。

今回の“つどい”に参加した奨学生たちにとって非常に大きな意味を持つ数日間となっていると確信出来る訪問となりました。



「東日本大地震・津波遺児」の現状を語る大学奨学生

これまでのフェアで、約 500 名の方が AED の操作や、心肺蘇生法の体験をされました。通りがかりに「なかなかこんな機会もないしねえ」と言っておられた女性や初めは面白半分だった中学生のグループが次第に前のめりになって応急手当普及員の話に聞き入る様子などに触れ、“救命”の敷居を低くすることができたのではないかと思います。

今後も数多く人が集まる駅で、消防等のご協力をいただきながら、J R 西日本との共催により各地でフェアの開催を行ってまいります。声なき「助けて」にこたえるあなたの勇気を後押しするために。

AED・心肺蘇生法の体験コーナー

たった15分程度で簡単にAEDの操作や心肺蘇生法を体験出来ます。



小さなお子さんから60代以上の方まで幅広く体験しています。

非常ボタン体験コーナー



押してみると意外と固い非常ボタン。もしもの時の為に一度、押してみませんか。

● 消防からのお声 ●

宝塚市消防本部警防課 課長

大谷 英次さん



消防が取り組む新しい共生の領域

近年、少子高齢化の進展や、生活習慣病などによる疾病構造の変化から、救急需要が増加するとともに、都市の高層化・深層化、異常気象等も影響して、自然災害・人的災害の態様も極めて複雑、複合化を呈し、潜在的な救急需要の増大が現実のものとなっています。これらの社会事象は、現状の消防体制の限界を超え、地域住民への救命の架け橋を寸断させてしまうおそれさえあります。

今後、私達は、安全で安心な社会を実現するために、応急手当の普及啓発を通じて市民救命力を育むとともに、地域コミュニティが中心となった自助、共助による救護体制の確立と発展を支えていかなければなりません。救急フェアは、地域における新しい共生社会のスタートの場として、駅構内を利用し、J R 西日本財団及び J R 西日本の応急手当普及員の資格取得者が中心となって、地域住民などに対して心肺蘇生法や AED の使用方法を含めて、命の大切さをも伝えるものです。こういった取り組みは、地域共同体としての新たな救命救護体制を市民に浸透させていくうえで、深い意義をもつものです。

今後の開催予定

平成23年10月8日(土) 13:00~16:30

J R 伊丹駅 西側有岡城跡史跡公園

協力：伊丹市消防局

平成23年10月15日(土) 10:00~12:00

J R 尼崎駅 北側駅前広場

協力：尼崎市消防局

協賛：潮江社会福祉連絡協議会

後援(予定)：尼崎市

(いずれも申込み不要、参加無料、雨天決行)

消防コーナー(大阪駅・天王寺駅での開催模様)



救急隊によるデモンストラーションを間近で見学出来ました。



消防服を試着して記念撮影。小さなお子さんも楽しみました。

朗読劇『さとうきび畑の唄』の開催

朗読 ういっしゅ



朗読劇の様子

メンバーの一人がJR福知山線列車事故に遭遇したことをきっかけに結成された朗読 ういっしゅは、事故を風化させることなく、またかけがえのない「いのち」が人災や事故により奪われることがないようにとの思いを込めて、「いのち」を題材とした様々な朗読劇を行っています。これまでに全国の150校近い小学校などを訪問し、朗読劇を通して「いのち」の大切さを子どもたちに伝えてきました。終戦の日を間近に迎えた8月7日には、伊丹市内のホールにおいて朗読劇『さとうきび畑の唄』を開催いたしました。冒頭、JR福知山線列車事故に遭遇したメンバーから、事故時の体験についての講話があった後、プロの音楽家によるピアノとチェロの調べにのせて『さとうきび畑の唄』の朗読劇が行われました。当日会場を訪れた100名を超える参加者は、臨場感あふれる朗読劇に静かに耳を傾けていました。



JR福知山線列車事故での体験を語る五十嵐さんの様子

『夏のエンディングセミナー』の開催

應典院寺町倶楽部

大阪市天王寺区にある應典院寺町倶楽部において、夏のエンディングセミナー2011が開催されました。今年は、「遺族とグリーフワーク」と題し、人と人、あるいは人と地域のつながりが失われ、



セミナーの様子

思いやりや助け合いの心も冷めていく「喪失」の時代と言われる中で、新たなつながりを再生していくために必要なことは何かといったことを、3回連続でゲストの方とともに考えるセミナーでした。7月23日は「仏教とスピリチュアルケアをつなぐもの」とのテーマで、飛騨千光寺の住職であり、臨床での活動を幅広く展開して来られた大下大圓さんをゲストに迎え開催されました。大下さんからの約1時間の講演後に、「スピリチュアルケアに関する必要な教育とは」「末期癌が原因で周囲に八つ当たりする身内への対応は」などの参加者からの質問に、大下さんが率直に答えていく中で、スピリチュアリティへの期待や関心の高まりを感じました。



大下さん(左)と應典院代表(右)との対談の様子

『夏休み子供向け防災講座』の開催

大芝連合運営協議会防災部会

大芝連合運営協議会防災部会では、“地域の命やわがまちは地域で守る”という思いのもと、毎年、冬の防災訓練のほか、地域住民の防災意識向上を目的とした防災講座を年2回開催しています。8月27日には、岸和田市内の小中学校で「夏休み子供向け防災講座」が



ロープワークに取り組む子どもたち

が開催され、地域の子どもたちとその家族など約40名が参加されました。子どもたちが興味をもって防災を学べるよう工夫された地震関連のアニメ上映会や岸和田市消防署によるロープワーク講習などが行われました。ロープワーク講習では、自分よりも長い縄に悪戦苦闘しながらも、出来るようになるまで積極的に消防隊員に質問する子どもたちの姿が見られました。また、親子で参加する体育館で宿泊する避難所体験では、空き缶を使っての炊飯や、避難時を想定した簡易マット等を使った寝床づくりに熱心に取り組んでいました。防災講座を通じて子どもの頃から防災知識を身に付けさせようとする、高い防災意識を感じました。



簡易マットを使った寝床づくりをする様子(写真提供:大芝連合運営協議会防災部会)

『救急講座』の開催

甲子園口地区まちづくり協議会

阪神淡路大震災をきっかけに結成された甲子園口地区まちづくり協議会では、毎月1回実施する防災に関する活動など地域の安全に関する様々な活動に取り組んでいます。7月2日



応急手当講習の様子

には上甲子園センターで『救急講座』が開催され、地元の瓦木消防署による応急手当講習と、住民の方による阪神淡路大震災の実体験に基づく防災講話が行われ、70名を超える地域住民の方々が参加されました。応急手当講習では、AEDの使用方法等の実技講習があり、「呼吸をしていない人は心臓が止まっていると考えてもよいのか」などの積極的な質問が参加者から寄せられました。防災講話では、「阪神淡路大震災では住民による救援活動が行われたが、日頃からの近所付き合いと助け



合いの精神が、防災では大事である」との体験談に熱心に聞き入る参加者の姿を見て、災害時には一人でも多くの方を“助けたい”という強い思いを感じました。

『第5回災害医療救護訓練』の開催

社団法人高槻市医師会

社団法人高槻市医師会では、全国でもまれな医療関係者・災害関係者による災害医療救護訓練を平成19年より行っています。今年、救急医療週間である9月10日に、高槻市内の小学校を会場に「第5回災害医療救護訓練」が開催されました。訓練開始前には、AED講習会やキッチンカーによる炊き出し、起震車体験、救急車や防災関係機材の展示が行われました。



AED講習会の様子

東日本大震災の発生による防災意識の高まりもあり、多くの方が会場を訪れていました。訓練では、大阪府北部で震度7の地震が発生したとの想定に基づき、会場に設置された模擬救護所において医師による患者のトリアージや応急処置、救急車による患者の病院搬送が行われました。医師や看護師などの医療関係者及び警察・消防関係者など約250名による実践さながらの訓練の様子に、見学者たちは熱心に見入っていました。



災害医療救護訓練の様子
(写真提供：社団法人高槻市医師会)

東日本大震災訪問録 ～被災地に立って思うこと～

当財団では、4月に東日本大震災の支援・救済活動等に対する緊急助成の募集を行い、多数の応募の中から10件の活動に助成を行いました。東日本大震災に関しては今後も継続的に支援していく必要があると考えていますが、当財団として今後どのような支援を行っていくべきかを考えるため、このたび被災地を訪問しました。



壊された建物



復旧・復興に向けた活動

8月の風の強い日、いわて花巻空港に降り立ち、一路岩手県野田村に向かった。道中、めちゃくちゃに壊れた建物や数え切れないほどの巨大な瓦礫の山、10mを越える防潮堤を乗り越え山肌に刻まれた津波の爪跡、港に打ち揚げられた船など、至るところにある悲惨な光景にただただ呆然とし、震災から半年が経過してなお、震災直後のその場所にいるかのような錯覚を覚えた。

その一方で復興に向けた息吹も感じることができた。瓦礫の撤去や建物の建設など、少しずつではあるが、復旧から復興に向け一歩一歩踏み出していた。



被災状況を語る渥美氏



野田村仮設住宅

野田村は、岩手県北東部にあり太平洋（野田湾）に面している。震災では、なぎ倒された防潮林が津波とともに村の中心部に押し寄せ、37名の方が亡くなり、502棟もの家屋が被害を受けた。「野田村は、遠隔地のため、震災直後は十分な支援が行き届いていなかった」当財団の事業審査評価委員で、日本災害救援ボランティアネットワーク理事長でもある渥美公秀氏はこう語った。渥美氏は、「8月で瓦礫撤去も終了する。今後は、被災者一人ひとりに寄り添う活動や、野田村の習俗等を学んで人間関係を深めつつ、一緒になって復興まちづくりに向けた活動を行うことが重要である」と、地道で息の長いボランティア活動の必要性を強く訴える。渥美氏は現在、村内5箇所の仮設住宅を回り、被災者への声かけ等の活動を継続するために、ボランティアが宿泊できるベースキャンプの建設に向け奔走している。



[SAVE IWATE]との意見交換



支援物資を提供する「物資部」

盛岡市の東日本大震災被災地支援チーム「SAVE IWATE (セーブ イワテ)」を訪問した。「SAVE IWATE」は、NPO法人シーズ加古川等を中心に結成された「東日本大震災応援ひょうご NPO ネットワーク」が、当財団の助成金を活かして、阪神淡路大震災の経験やノウハウを提供し支援を行ってきた団体である。同団体は、支援物資の募集やお届け、ボランティアの後方支援のほか、市から受託した「もりおか復興支援センター」を運営し、盛岡市に避難している約1,400名の被災者の方々を対象に情報提供や交流スペースの提供、各種相談業務を行っている。「SAVE IWATE」代表の寺井良夫氏は、「沿岸被災地では未だ復旧活動が続いている地域も多い。阪神淡路大震災の前例を活かし、できるだけ早くセンターの機能を充実させたい」と語る。生活物資を被災者の方々に提供する「物資部」も訪問したが、揃っていないような必要な物資は未だ十分でない現状を目の当たりにした。



応援メッセージが書かれた支援物資

震災から半年、地域により被災・被害の状況は一様でなく、復興とは名ばかりで未だ復旧の段階を脱していない地域も多い。今回の訪問で“延々と続く復興への道のり”の一端を垣間見て、長期的・継続的な支援の必要性を痛感するとともに、当財団が果たすべき役割は何かを考え続け、できることに積極的に取り組んでいく決意を新たにしました。

公募助成(活動助成)先の活動予定

現在助成を行っている団体の今後の活動予定をご紹介します。
詳細につきましては、各団体へ直接お問い合わせください。

灯人

(TEL:080-5330-1951 又は E-mail:tomoshihi0425@gmail.com)

月例会議

- 日程：平成23年9月23日(祝)13時～
 - 場所：いたみホール(事前予約、定員20名)
 - 内容：市民の方々にもご参加いただき、灯人の活動についての報告や今後の活動に関する会議を開催します。
- ※同会議は、今後月1回の頻度で開催していく予定です。

フレンズ!川西フェスティバル実行委員会事務局

(TEL:070-5506-5746)

又は E-mail:friendskawanishijikko@yahoo.co.jp)

『フレンズかわにし Lifesaving lecture & Concert』

- 日程：平成23年10月2日(日)14時～17時
- 場所：兵庫県川西市 アステホール(定員300名)
- 内容：救急に関する講習や展示、ミニコンサート等を行います。

NPO法人 LOVE&PEACE

(TEL:06-7657-8062)

又は E-mail:info@love-peace.ne.jp)

勉強会『子どもの目線で交通災害の予防と研修プログラム』

- 日程：平成23年10月9日(日)13時～16時
- 場所：大阪市立阿倍野市民学習センター(事前予約、主に小中高生を対象)
- 内容：「ふだんの暮らしの中にある危険」をテーマに車や電車だけに限らず、自転車についても意外と知らないルールやマナーを学べる勉強会を行います。

認定NPO法人日本レスキュー協会

(TEL:072-770-4900)

又は E-mail:info@japan-rescue.com)

ふれあい会

- 日程：平成23年10月1日(土)10時半～12時
12月3日(土)10時半～12時
- 場所：認定NPO法人日本レスキュー協会(伊丹市下河原2-2-13)(事前予約(個人も可))
- 内容：事故被害者やご家族、ふれあいに興味のある方とセラピードッグや新しい飼い主を探している犬等とのふれあいを行います。

NPO法人 Co. to. hana

(TEL:06-6654-8830)

又は E-mail:info@cotohana.jp)

『シンサイミライノハナ PROJECT (すみのエミュージックフェスタ内)』

- 日程：平成23年10月10日(祝)11時～17時
- 場所：名村造船所大阪工場跡地及び北加賀屋エリア
- 内容：活動拠点である北加賀屋エリアで震災へのメッセージの募集とシンサイミライノハナの展示をします。

西宮カウンセリング研究会

(TEL:072-626-2335)

公開講座『子育てダイエツト～子どもの声を聴きましょう～』

- 日程：平成23年10月21日(金)13時半～15時半
- 場所：西宮市市民会館4階会議室(事前予約、定員95名、参加費500円)

NPO法人あすかコミュニティ

(TEL:06-6320-5252)

『防災アドバイザー講座』(全2回)

- 日程：(第2回)平成23年10月6日(木)19時～21時
- 場所：地域防災センター(大阪市東淀川区東中島5-15-15)

『災害防災講座』(全4回)

- 日程：(第2回)平成23年10月20日(木)19時～21時
(第3回)平成23年11月10日(木)19時～21時
- 場所：地域防災センター(同上)

- ◎10月頃から防災マップ作成を開始します。
- ◎防災に関する相談を受付中(月～金13～17時)
- ◎防災ボランティアを随時募集しています。

NPO法人オーシャンゲート ジャパン

(TEL:06-6212-6277)

又は E-mail:oceangate@fancy.ocn.ne.jp)

子ども応急手当普及&水面安全サポーター育成

- 日程：平成23年10月2日(日)、15日(土)、23日(日)
11月3日(祝)、13日(日)、23日(祝)
12月4日(日)、18日(日)
※毎月2～3回程度開催中
- 場所：和歌山県日高郡由良町大引960-1 白崎海洋公園
- 内容：いざという時の子どもに対する応急手当と人工呼吸、温水プールや海・川における水面安全管理方法等の講習を行います。

甲子園口地区まちづくり協議会

(TEL:0798-66-0036) ※火・木・土10時～16時

ふれあい広場

- 日程：平成23年11月5日(土)10時～12時
- 場所：御代開公園(雨天の場合：上甲子園公民館)
- 内容：可動式ポンプ、水消火器の扱い方の指導・実践体験。非常食(アルファー化米)の実演・試食、1月実施予定の発災型防災訓練の紹介、有志手作りの乗物や玩具で遊んだりします。

中越・KOBE 足湯隊

(TEL:078-574-0701 又は E-mail:ngo@pure.ne.jp)

《被災地 NGO 協働センター》)

足湯ボランティア随時、募集中!!

ご興味がある方は是非、お問い合わせください。
<http://www.pure.ne.jp/ngo/ashiyu.html>

今後の財団主催セミナー(予定)

【安全セミナー】

- テーマ：『災害と危機管理～みんなで考える災害への備え～』
- 日程：平成23年12月21日(水)13:30～
- 会場：アルカイクホール・オクト(定員500名、参加無料)
- 講師：京都大学防災研究所・巨大災害研究センター教授 岡田 憲夫
一般社団法人日本ガス協会常務理事 池島 賢治
※事前申込み必要
※詳細は、10月下旬以降、財団ホームページ等でお知らせいたします。

編集後記

今年の“節電モード”の夏を皆様はどのように過ごされたのでしょうか。私自身、特別なことは出来ませんでした。エアコンの設定温度を上げたり、細めに電化製品のコンセントを抜いたり簡単な節電に取り組んでみました。身近でとても小さな取り組みであっても、多くの方が助け合うことで、乗りきっていくことができるのだと感じました。財団においても、地域のコミュニティ作りに関する活動への助成や救急フェアの実施など、助け合いをキーワードに事業に取り組んでいきたいと思いました。

最後に、今回の発行にあたりインタビューのご協力をいただきました若林先生をはじめ、宝塚市消防本部の大谷様や関係者の皆様にご心より御礼申し上げます。今後ともよろしく願いいたします。

(編集者：小山)